

J・S・ミルの政治思想史上における地位

——消極的自由（二七）、自由論（二二）——

大谷 恵 教

J・S・ミルが生存した一九世紀は、前にも述べたようにあらゆる意味において過渡的時代であった。かれは、鋭い分析力と洞察力と英知とをもって、かれの時代のすべての状況を分析し、批判すべき点は容赦なく徹底的に批判すると同時に、来るべき時代をいちはやく予見して、種々様々な弊害に陥らないように、自由と民主主義の立場から、きわめて適切な警告を発しかつ対策をも提示して、後世にいちじるしい影響を与えた。とくに、トマス・ヒル・グリーンおよびかれが創始者であるオックスフォード理想主義学派、それにイギリスの社会主義——民主社会主義——や労働運動に与えた影響には、きわめて大いなるものがあつたといつても、決して過言ではないであらう。これらの影響についていちはちいば限りがないので、それらの主要なものについて論じて、ミルの政治思想史上における地位を考えてみたい。

まず、第一に、ミルは、人間の本性には二つの面があり、一つの面は人間は誤謬を免れえないところの可謬的存在であることを指摘すると同時に、それにもかかわらず人間はもう一面においては知的、道德的存在であつて、その誤謬を訂正しうる存在であるという側面をも指摘して、人間における理性的性格と非理性的性格との混在を認めて、人

間を二律背反的な二元的性情の持ち主とみなし、「人間は不完全であるが、同時に無限の向上性をもつ」という民主主義的人間観をはっきりと示して、民主政治を支える根幹的な人間観の在り方を明確にした功績は大きい。

人間を一方的に誤謬ばかりを冒すまったく非理性的、性悪的な存在とのみみなすならば、そのような立場からはホップズやムッソリーニやヒットラーの場合におけるように悲観主義的、侮蔑的人間観が生じて、理論的にも実際的にも必然的に専制主義と絶対主義に陥らざるをえない。

他方、人間を一方的に理性的、性善的な存在とのみみなすならば、ルソーが指摘したように政治も法律も一切不要であって、「民自然而治」ということになり、民主政治をも含めていかなる政治もその必要はないのである。そして、もしも現実のこの世界において、そのような立場を一人の人間がとるときには専制主義と絶対主義となり、少数者が主張すれば寡頭政となり、すべてのものが主張すれば無政府主義に陥るのである。

したがって、人間を二律背反的な二元的性情の持ち主とみなして、「人間は不完全である」と認めるところに、「人間はみな間違いを冒しやすい」という認識が生まれて、謙虚、寛容、互譲、妥協などのデモクラシーが要請する諸徳が生じ、また人間の「無限の向上性」の承認から、ソフィスティック、虚無主義、デカダニズム、墮落した相対主義、あるいは破壊的な批判主義に陥らないで、「互いに正し合って、相い携えてともに理想に向って限りなく接近することができる」という建設性、向上性、創造性、理想性、連帯性、協同性、および「人格の向上・完成」というデモクラシーの最高目標も生まれるのである。

そして、右のような人間がもつ相い反する二つの性格を結合して、「人間は不完全であるが、同時に無限の向上性をもつ」という人間観——民主主義的人間観——の上にこそ、「討論による政治」(Government by discussion)や

「話し合いによる政治」(Government by talk) に基礎をおく民主政治が成立するのである。民主政治の根底には、それを支えるにふさわしいこのような人間観がどっしりと横たわっていることを、われわれは——とくに物質至上主義で、しかも人間を極端に楽観視しすぎる現代においては——とかく忘れ勝ちであるが、こうした民主主義的人間観は幾度繰り返し強調されても強調されすぎることはない。ミル以前には、典型的にはロックによって民主主義的人間が主張されたが、ミルがこのような民主主義的人間観を強調したということはデモクラシーの根幹にふれるものがあり、特筆に値しよう。

第二に、ミルは、かれが陥った精神的危機を境に、かれ以前の功利主義学派の人びとによって顧みられなかった人間の内面性、質的面を注目重視して、人生の最高の目的や価値は物質的官能的な満足や快楽にあるのではなくて、精神的な満足にあるのだといい、そのためには人間はそれがもつ諸能力を、完全に矛盾のない全体にもっとも調和的に発展させること——すなわち「人格の向上・完成」——が最高度に重要であると説いた。

このようなかれの考え方は、次のT・H・グリーンに非常に大きな影響を与えたものと思われる。グリーンはこの考え方を、ルソーやドイツ理想主義の考え方とともに継承・発展させて、自由や権利の根底には道徳的義務があり、人間とデモクラシーの最高目標は「人間人格の向上・完成」にあると明確に主張するにいたった。オックスフォード理想主義学派の人びとも、たとえばH・J・ラスキのように「最善の自我の実現」が人間とデモクラシーの最高目標であるといっているように、同じ考え方を継承している。

いずれにせよ、ミルのこのような考え方は、悪魔の誘惑に負けたり、欲望の奴隷になったりすることなく、神の命令や理性の命令にしたがって生活するという「精神的自律」、すなわち「道徳的自由」を、人間やデモクラシーの最

高目標ないし最高価値と考えたということであり、また自由の最高段階のものと考えたということである。

現在のわが国では、人間や人生の最高の目的や価値というと、物質的あるいは官能的な満足や快楽と考えられ勝ちな物質至上主義や官能主義が横溢しているが、実はそうではなくて、二律背反的な二元的性情の持ち主である人間が、一つの体のなかでの理性的性格と非理性的性格との激しい葛藤のなかで、理性的性格が非理性的性格をコントロールして、神や理性の命令にしたがって生活するようになって「精神的自律」をもつにいたること——「道徳的自由」をもつこと——こそ、知的、道徳的存在としての人間の最高の目的であり価値なのである。

また、デモクラシーというと、わが国では通常一つの政治形態としてしか考えられていないが、そのような考え方はあまりにも一面的にすぎる。デモクラシーは、N・ミッケレムが指摘しているように、(一)理想としてのデモクラシーと、(二)政治的装置としてのデモクラシーという二つの面をもつていて、その第一の面の理想としてのデモクラシーが「人間人格の向上・完成」であって、これがデモクラシーの最高目標なのであり、それを実現するための手段として第二の面の政治的装置としてのデモクラシーがあるのである。この点で、ミルは、デモクラシーの第一の面をも明確に指摘したといえよう。

そして、この道徳的自由を充実させて人格の向上、完成をはかるためには、人間は不完全で可謬的存在であるので、他のひとの異なる意見や考えに謙虚に耳を傾け、かれらとよく討論もして、自分の意見や考えに誤まりがあればその非を卒直に認め、他のひとの言い分に正しいものがあれば素直にそれを受けいなければならない。すなわち、人間人格の向上・完成や道徳的自由の充実化と確立という目的の達成のためには、その手段として言論・思想・討論・出版・報道・集会・結社などの自由という「市民的自由」や少数者の自由と権利の擁護が不可欠なのである。ミルが

これらの市民的自由を強調したことは、いままで何回となく述べた通りである。そして、民主政治が陥り勝ちな弊害や欠陥の一つとして、かれは多数者の専制や感情の専制や世論の専制を厳しく批判・攻撃して、個性や多様性や独創性などの重要性や少数者の自由と権利の擁護を主張して、社会が一様化して停滞・衰退することなしに発展と幸福を享受すべきだとしたことは、特記すべきである。また、少数者の自由と権利の擁護の政治版がかれの比例代表制論であり、今日かなりの国ぐにでもそれが採用されていることを思えば、やはりその主張は忘れられてはなるまい。

さて、いまミルの民主政治が陥りやすい弊害や欠陥についての指摘に少しふれたが、それに関していえば、かれはそれについて種々言及して対応策を示している。第一に、民主政治は前述のように一様化に陥って、人類から思考における道徳的勇氣と独立自尊の精神を奪う危険性があり、そうなると中央政府（多数者の希望の代表としての）が社会とか公共の利益や福祉の名において個人の権利を容赦なく踏みこむようになることを指摘したことは、現代においても見られる現象であり、その鋭い指摘は大変なものである。第二には、民主政治が「凡庸性」に陥りやすい弊害をもミルは指摘して、高い才能と教養をもった少数の人びとを全国区比例代表制のもとで国政へ選出すべきことを訴えたことは、現状を顧みるとき傾聴に値しよう。また、支配団体における不十分な精神的資格や、一部の人びとや党派や階級の利益を追求する立法が行われやすいことを、民主政治が陥りやすい弊害の一つとかがみなしたことも、現代においても十分首肯しうるところである。そして、なによりも民主政治が陥りやすい最大の弊害として、ミルは「多数者の専制」を指摘して、それを「社会的専制」と名づけて、その弊害は政治的専制どころの比ではないところの最悪のものであると喝破したことは、かれの偉大な功績であり、民主政治は決して多数者万能ではないという名教訓を人類に永遠に残したといえよう。それに加えるに、多数者は実際には多数者と称するに成功した人びととか、あ

るいは多数者のなかの多数者にすぎない等々と、多数者を分析したことも重要なことである。

以上のような自由とデモクラシーの堅持というミルの立場は、やはりグリーンやオックスフォード理想主義学派やイギリスの社会主義に大なる影響を及ぼしている。

さらに、ミルは、かれ以前の功利主義学派の人びとのように人間を、単なる原子的個々人としてとらえずに、社会的存在としてとらえ、その結果利己心の主張やそれにもとづく私的利益のみをはかることに厳しい批判の眼を向けて、社会において共同生活を営む個人における「協同」、「私利を図らない努力」、「利他心」の不可避性と重要性を指摘し、かつキリスト教の「隣人愛」が功利主義道徳の理想であることを強調し、その理想に近づくための手段として、各個人の幸福や利益をできるだけ「全体の利益」と調和させることの重要性や「公共善」の増進を説き、また「公共精神」の肝要なことを主張したことも、またグリーンやオックスフォード理想主義学派の人びとやイギリスの社会主義に大きな影響を及ぼした。すなわち、グリーンは、国家は「公共善」の実現をはかるものだという「積極的国家論」を唱え、この思想は理想主義学派の人びとも受け継いでおり、イギリスの社会主義においても然りである。

労働者階級に関しては、ミルは、当時の労働者階級が不幸な状態に陥れていることを厳粛に認め、それは当時の社会組織の欠陥に原因があるとして、その欠陥を鋭く指摘した。労働者階級の望ましい地位については、かれは、「従属保護の理論」を厳しく批判して「自立の理論」の立場に立ち、労働者たちを「自由人」として取り扱うべきだと主張した。労働者階級の将来の見通しに関しては、かれは、かれらが合理的人間になされうるその程度如何にかかっているが、教育によってそれは可能であるとした。このような基本的立場から、ミルは普通選挙権を主張して、労働者階級にも選挙権を与えるべきことを説いた。このような態度は、当時においては革新的なものであった。しかし、

当時の労働者階級の知的道徳的レベルを勘案して普通平等選挙権の立場はとらず、知的レベルの高い人びとには複数投票権を与えるべきことを説いた。これは、当時の過渡的情況においては、あるいは止むを得ざるものであったであろう。そしてまた、ミルは、婦人の隷従からの解放をも強調して、婦人参政権論の先駆者でもあった。

最後に、ミルは、前述のように自由と民主主義を堅持することを主張したが、経済的自由放任には反対し、自由と民主主義の範囲内での経済改革は必要だと考え、その当時の所有制度を分析・批判すると同時に社会組織の欠陥を指摘して、社会主義は実験に値すると主張し、とくにフリーエ主義には深い理解を示したが、かれ自身は協同組合ないし協同主義の原理あるいは相互協同の原理にもとづく社会変革を主張し、それが辿りつく道について、「個人の自由および独立と集団的生産の道徳的知的経済的な利益とを結びつけるところの、また社会が勤労者と有閑者とに分裂するのを廃止し、自分の個人的な勤労の努力によって正当に獲ち得た社会的特権以外の社会的特権を抹殺することによって、少くとも産業の部面において、暴力に訴えたり掠奪したりすることなしに、また既存の習慣や期待を急激に攪乱することすらしに、民主的精神がもつ最善の抱負を実現化するところの一社会変革の道」と強調して、「勤労者と資本家との共同組織」と「労働者たち同志の間の共同組織」の二つを挙げ、そのうちの後者をとくに望ましいものとした。

右のようなミルの考えも、グリーンやオックスフォード理想主義学派の人びとやイギリスの社会主義と労働運動の人びとに、非常な影響を与えたものと思われる。すなわち、グリーンは、組合営業の代りに、前述の積極的國家論を通して國家による國民に対する経済的社会的條件の整備を唱え、理想主義学派のなかのファビアン社会主義者になつた人びとは、自由と民主主義の範囲内での社会主義——民主社会主義——を主張し、さらにはラスキのようなひと

出たし、またイギリスの労働運動の人びとは「協同精神」を強調して、人びとが協同して中間商人を排除して搾取をなくすことをその特徴の一つとし、さらにイギリスの社会主義者たちは、隣人愛や協同精神を力説して「四海同胞」の精神から社会主義を主張し、かつ社会主義を自由と民主主義の延長線上にあるものと考えてきている。

このようにして、ミル以降のイギリスの自由主義は、自由主義を経済的自由放任主義と同一視し勝ちな大陸的自由主義とは異なったものになっていったのである。

以上、J・S・ミルを研究してきて、最後にそれを簡潔にまとめてみたが、そこからわかるように、かれは一九世紀という過渡期におけるイギリスの最大の思想家であると同時に世界的な大学者であり、後世に与えた影響は頗る大であつて、次の時代への――直接的にはとくにT・H・グリーンへの――橋渡しをしたといえる。ミルは自由と民主主義の研究史上において、最大の業績を残した学者の一人であつた。

〔備考〕 註は、いままでの論文や拙著のなかに記してきたので、ここでは省略することにした。